

[論文]

異教世界の中での共同体形成：初期キリスト教 のディアスポラ状況

原 口 尚 彰

序 問題の所在

1. 初期ユダヤ教とディアスポラ概念の形成
2. 初期キリスト教のディアスポラ状況とその課題
3. 結論と展望

序 問題の所在

ディアスポラ（*διασπορά*）という言葉は、イスラエルを離れて異邦の地で暮らす離散のユダヤ人を指すギリシア語であるが（申 30：4；イザ 49：6；詩 146：2；ネヘ 1：9；ソロ詩 8：28；9：2；II マカ 1：27）、初期のキリスト教徒が異教徒の間に離散して暮らす状況の形容としても使用されている（ヤコ 1：1；I ペト 1：1）。このために、初期キリスト教書簡の一部が、初期ユダヤ教のディアスポラ書簡に準じてディアスポラ書簡と呼ばれることがある¹。しかし、初期のキリスト教徒の置かれた状況が、如何なる意味でディアスポラなのかについての立ち入った考察はなく、ディアスポラ概念の適用範囲や、ディアスポラ状況における課題についての十分な分析もない。従って、初期キリスト教の置かれたディアスポラ状況を文献学的・歴史的に解明することは、新約聖書学に課された重要な課題であると言える。本研究は、予備的考察として、初期ユダヤ教におけるディアスポラ概念の形成とその展開について叙述した後に、初期キリスト教の置かれたディアスポラ状況を、ギリシア・ローマ世界に展開したディアスポラ・ユダヤ教の置かれた状況や課題と対比しながら分析し、一定の理解に到ることとする。

¹ 初期ユダヤ教のディアスポラ書簡の詳しい分析については、I. Taatz, *Frühjüdische Briefe: die paulinischen Briefe im Rahmen der offiziellen religiösen Briefe des Frühjudentums* (Freiburg in der Schweiz: Universitätsverlag; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1991) を参照。

1. 初期ユダヤ教とディアスポラ概念の形成

ディアスポラという用語の形成

ディアスポラ (διασπορά) という用語は、動詞 διασπείρω (「散らす」使 8: 1,4; 11: 19) より派生したギリシア語名詞であり、ちりぢりになった状態を指す (フィロン『賞罰』115; プタルコス『道徳論集』1105A)²。この用語は七十人訳聖書において、ユダヤ人が故郷を離れ異邦人の間に生活する状況 (申 28: 25; エレ 15: 7; 41: 17; ダニ 12: 2; ユディ 5: 19), または、離散のユダヤの民を指す術語として使用されるようになり (申 30: 4; イザ 49: 6; 詩 146: 2; ネヘ 1: 9; ソロ詩 8: 28; 9: 2; II マカ 1: 27), 以後の使用法を方向付けた (ヤコ 1: 1; I ペト 1: 1; ユスティノス『トリュフォンとの対話』117.2)³。

ディアスポラ状況

ユダヤ人のディアスポラ (離散) 状況が生じた前史として、前 8 世紀に起こったアッシリアによる北王国イスラエルの住民の捕囚の出来事や (王下 15: 29; 17: 3-6; 18: 9-12; 代下 5: 6, 26; ANET 284-285), 前 6 世紀に起こったバビロン捕囚の出来事が挙げられる (王下 24: 10-17; 25: 1-21; 25: 26; エレ 41: 16-43: 7; 52: 28-29; ANET 564)⁴。尚、ペルシア時代に遡るアラム語書簡の存在により、当時のエジプトには、ナイル川上流のアスワン付近のエレファンティネにユダヤ人傭兵の入植地があったことが知られている (ANET 491-492)⁵。

ヘレニズム時代になると、離散状況は大きく広がりを見せ、周辺世界の主要な都市にユダヤ人が数多く移り住むようになった。プトレマイオス朝エジプトの首都アレクサンドリアには、特に多数のユダヤ人が住んでいたことが知られている (フィロン『フラックス』43, 55, 57; 『ガイウス』132)⁶。また、シリアの首都アンティオキアには、ユダヤとの地理

² Bauer-Aland, 378; W.C. van Unnik, *Das Selbstverständnis der jüdischen Diaspora* (Leiden: Brill, 1993) 73-88 を参照。

³ K.L. Schmidt, “διασπορά,” *ThWNT* 3.98-102; D. Sänger, “διασπορά,” *EWNT* 1.749-751; A. Stuiber, “Diaspora,” *RAC* 3.972-82; 原口尚彰「初期ユダヤ教におけるディアスポラ」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 28 号 (2010 年) 1-23 頁を参照。

⁴ L.A. Sinclair, “Diaspora,” *TRE* 7.709.

⁵ A. Cowley, *Aramaic Papyri of the Fifth Century* (Oxford: Clarendon, 1923); B. Porten / J.C. Greenfield, *Jews of Elephantine and Arameans of Syene* (Jerusalem: Hebrew University Press, 1974) 90-98 を参照。

⁶ V. Tcherikover, *Hellenistic Civilization and the Jews* (Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1959) 330-334; J. Barclay, *Jews in the Mediterranean Diaspora: from Alexander to Trajan* (323

的な近さもあって、大きなユダヤ人人口が生まれた（ヨセフス『古代誌』12.119；17.24；『戦記』7.43-45；II マカ 4：32-38）⁷。他方、セレウコス朝のアンティオコス三世は、メソポタミアやバビロン地方のユダヤ人二〇〇〇人を小アジアのリュディアやフリギアへ傭兵として入植させ、以後、この地域にはユダヤ人が多く住むようになった（ヨセフス『古代誌』12.148-153）⁸。

ローマ帝政期には、ユダヤ人の移住はローマ帝国全体に広がっており、当時の世界でユダヤ人の住まない都市はほとんどないと述べられている（シビュラ 3.271；ヨセフス『古代誌』14.115；『戦記』2.398；7.43；フィロン『ガイウス』281-284）⁹。使徒言行録によれば、五旬節の祭に参加するためにエルサレムにやって来たユダヤ人の出身地は、ユダヤ以外では、バルティア、メディア、エラム、メソポタミア、カッパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、リビア、ローマ、クレタ、アラビア等、広範囲であった（使 2：7-11）¹⁰。

2. 初期キリスト教のディアスポラ状況とその課題

異教世界における離散状況

ディアスポラ（διασπορά）という言葉は、新約聖書ではヤコ 1：1；I ペト 1：1 に出て来ており、初期のキリスト教徒が異教徒の間に離散して暮らす状況の形容となっている。紀元 4 世紀にコンスタンティヌスによって公認される以前のキリスト教は、ギリシア・ローマ世界の中では少数者の集団に過ぎず、初期キリスト教徒は圧倒的多数の異邦人の間に生活していた。ディアスポラ（離散）という言葉は、公同書簡の受信人だけでなく、初期キリスト教徒全体が置かれた状況を表現すると言える。

BCE-117 CE (Edinburgh: T & T Clark, 1996) 20-30; E.S. Gruen, *Diaspora: Jews amidst Greeks and Romans* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2002) 4.

⁷ E. Schürer, *The History of the Jewish People in the Age of Jesus Christ* (3 vols; Revised English Version; rev. & ed. G. Vermes / F. Millar / M. Goodman; Edinburgh: T & T Clark, 1986) 3.13; C.H. Kraeling, "The Jewish Community in Antioch," *JBL* 51 (1932) 130-160, 9.

⁸ ヨセフスは、セレウコス一世ニカトルが、シリアや小アジアに新たに建設した諸都市とその周辺にユダヤ人を傭兵として多数移住させ、ギリシア人と同等の市民権を付与したとしている（ヨセフス『アピオン』2.39；『古代誌』12.119；『戦記』7.110）。しかし、このことは裏付ける他の証拠がないために、史実性が疑われている。Tcherikover, 328-329; P.R. Trebilco, *Jewish Communities in Asia Minor* (DSNTSSM 69; Cambridge: University Press, 1991) 168 を参照。

⁹ Stern, *JFPC* 1.117-118.

¹⁰ 使徒言行録に出てくる個々の挿話の細部の歴史性は疑わしいが、ディアスポラ・ユダヤ教の一般的状況の叙述としては信頼できる。このことについては、原口尚彰「ディアスポラのユダヤ教を知る資料としての使徒言行録」『ヨーロッパ文化史研究』第 12 号（2011 年）123-140 頁を参照。

イエスの死と復活の後にエルサレムに成立した原始教会はユダヤ人信徒によって構成され、その宣教は当初はユダヤ人に向けられていた。しかし、ステファノの殉教（使徒 7: 48-60）の後に起こった迫害を契機に（使徒 7: 54-60, 8: 1-3）、ヘレニストたち（ギリシア語を使用するユダヤ人信徒たち）は、サマリヤ、フェニキア、シリアへと散らされて行き、その先々で福音を宣べ伝えた（使徒 8: 3-25; 11: 19-24）。特に、アンティオキアでは、ユダヤ人という民族の枠を越えて、異邦人たちに対する福音宣教がなされ、異邦人信徒が生まれた（使徒 11: 20-24）。アンティオキアは属州シリアの首都であり、ここから宣教師が派遣されて、キリスト教はギリシア・ローマ世界のギリシア語圏全体に広がって行った（使 13: 1-14: 28; 15: 36-18: 23; 18: 24-20: 38）。また、首都ローマにも 1 世紀中葉には福音が達していたことは、使 18: 2; 28: 15 がローマにおける信徒の存在を前提にしていることが示している（スエトニウス『ローマ皇帝伝』「クラウディウス」25 節も参照）。さらに、I ペトロ書冒頭の宛先や（I ペト 1: 1）、黙示録冒頭に出て来る天上のキリストが送った書簡の宛先は（黙 2: 1-3: 22）、1 世紀末の小アジアの広汎な地域にキリスト教徒の存在が広がっていたことを前提としている。

キリスト教徒達が異教社会の中で宗教的アイデンティティを維持する課題は、ディアスポラのユダヤ教徒が直面していた課題と並行する。初期のキリスト教徒は、ディアスポラ・ユダヤ教の遺産を選択的に継承しながら、周辺世界に対するアイデンティティを形成して行った。しかし、民族宗教であるユダヤ教において、宗教意識と民族意識とが重なっているのに対して、世界宗教になって行くキリスト教において、宗教意識は民族的帰属を超えるので、周辺世界との関係は自ずと異なって来る。ユダヤ人という民族の枠を超えたキリスト教は、早い時期から異邦人世界に対して宣教師を派遣して組織的宣教を行った（マタ 28: 16-20; ルカ 24: 47-49; 使 13: 1-3）。初期のキリスト教徒は、社会のマイノリティ集団として自己の権利を守るというよりも、福音を異邦人世界に対して宣教するという意識が強かった（フィリ 1: 12-14 を参照）。

共同体の形成と連帯性

ディアスポラの地において、信徒が信仰生活を続けるためには、共同体を形成する必要があった。ディアスポラのユダヤ人たちは、ギリシア・ローマ世界の諸都市において、民族的・宗教的アイデンティティを維持するためにそれぞれの地で特定の地域に集住して自

治組織を形成し、共同体を営んでいた¹¹。自治組織はアレクサンドリアや、キレネのベレニケーや小アジアのサルディスでは、ポリテウマ (πολίτευμα) とも (ヨセフス『古代誌』14.235; アリステアス 310; *CIG* 5361), ポリテΙΑ (πολιτεία) と呼ばれた (ヨセフス『古代誌』14.117)¹²。また、小アジアの諸都市周辺におけるユダヤ人傭兵の共同体は、カトイキア (κατοικία) と呼ばれた (ヨセフス『古代誌』12.147-153; *CIJ* 1.775)¹³。ユダヤ人共同体を指導したのは、ゲルーシア (γερούσια) であり (ヨセフス『戦記』2.412, 488; フィロン『フラックス』74), 長老たち (γερόντες; πρεσβύτεροι) によって構成され (ユディ 6: 15-17), その司たち (ἄρχοντες) によって指導されている (ヨセフス『戦記』7.47; フィロン『フラックス』78, 80, 117)¹⁴。ローマのゲルーシア (γερούσια) は、ゲルーシア長 (γερούσιάρχης) によって指導されていたことが碑文資料によって知られる (*CIJ* 1.9, 106, 119, 147)¹⁵。

同一のユダヤ民族に属する民族的連帯感が、本土のユダヤ人とディアスポラのユダヤ人には存在しており、「神は唯一、民族は一つ」といった宗教意識がそれを支えていた (ヨセフス『古代誌』4.201)。特に、エルサレムと神殿はユダヤ人世界全体の宗教的アイデンティティの中心で有り続けた (II マカ 3: 12; 5: 19; III マカ 2: 9, 16; ヨセフス『古代誌』5.112; 『アピオン』2.79, 193; フィロン『アブラハムの移住』92; 『ガイウス』212, 290)¹⁶。エルサレムはディアスポラのユダヤ人にとって、神が選んだ (III マカ 2: 9), 聖なる都であり (II マカ 1: 12; 3: 1; 9: 14; 15: 14; III マカ 6: 5; ソロ詩 8: 4), 母なる都 (フィロン『フラックス』46; 『ガイウス』281) であった。ディアスポラのユダヤ人達は、70年にローマ軍によってエルサレムの神殿が破壊される以前は、神殿を支えるために神殿税をそれぞれの共同体で集めてエルサレムへ毎年送っていた (ヨセフス『古代誌』14.112-113; 16.171; 18.312-313; フィロン『モーセの生涯』1.254; 『律法各論』1.53-154; キケロ『フラックス弁護』28, 66-69; タキトゥス『年代記』5.5.1)¹⁷。他方、神殿で行われる祭りに参加するためにディアスポラの民が巡礼として上京する習慣があった

¹¹ S. Applebaum, "The Organization of the Jewish Communities in the Diaspora," in *The Jewish People in the First Century* (以後、*JPFC* と略記; 2 vols; ed. S. Safrai / M. Stern (Assen: Van Gorcum; Philadelphia, PA: Fortress, 1974-1976) 1.464-503 を参照。

¹² A. Kasher, "Diaspora," *TRE* 7.714-715; Tcherikover, 299-301; Trebilco, 170-171.

¹³ Tcherikover, 298.

¹⁴ Schürer, 3.92-94, 102.

¹⁵ Schürer, 3.97-98.

¹⁶ S.D. Fraade, "The Temple as a Marker of Jewish Identity before and after 70 C.E.," *Jewish Identities in Antiquity* (FS. M. Stern; ed. L.L. Levine / D.R. Schwartz; Tübingen: Mohr, 2009) 237-266.

¹⁷ Schürer, 3.147-148; T. Rajak, "Diaspora," *RGG*⁴ 1.827; Trebilco, 16, 39; Barclay, 198, 419; S. Safrai, "Relations between the Diaspora and the Land of Israel," *JPFC* 1.185-199.

(ヨセフス『古代誌』17.26)。そのことは、使徒言行録が報告しているように、五旬節の時に沢山のディアスポラのユダヤ人が巡礼としてエルサレムにやって来ていたことにも反映している(使2:7-11)¹⁸。巡礼の旅はディアスポラのユダヤ人のユダヤ教徒としての宗教意識と民族意識を高めると共に、イスラエルの地のユダヤ人と交流を深める機会となった。

しかし、遠隔地に住むディアスポラのユダヤ人の共同体の日常的宗教生活の中心は、安息日毎にそれぞれの地で行われるシナゴークでの礼拝であった。ギリシア・ローマ世界の様々な都市にあるユダヤ人居留区にはシナゴークが存在したことが、文献資料と碑文資料によって確認される(ヨセフス『古代誌』16.164; フィロン『フラックス』45-48, 55; 『ガイウス』132, 137, 156; 『バビロニア・タルムード』「スッカ」51b; *CIJ* 1.282, 301, 318, 319, 343, 368, 383, 390, 425, 433, 504, 508, 509, 510, 537, 548)。シナゴークは安息日礼拝が行われる祈りの場(προσευχή)とも呼ばれ(ヨセフス『古代誌』14.258; 使16:13, 18)、ユダヤ人達が律法について学ぶ場であった(ヨセフス『古代誌』16.43; 『アピオン』2.175; フィロン『世界の創造』128; 『律法各論』2.62; 『ガイウス』156)。

これに対して、初期キリスト教徒は教会エクレシア(教会)を形成し(Iコリ1:2; IIコリ1:1; ガラ1:2; Iテサ1:1; 黙2:1, 8, 12, 18; 3:1, 7, 14他)、週の初めの日である日曜日に主日礼拝を行い(Iコリ16:2; 黙1:10; イグ・マグ9:1; バルナバ15:9他)、宣教と教育を行っていた。ディアスポラのキリスト教は個人レベルのみならず、共同体として異教社会に対峙していた。

ディアスポラのユダヤ人は、ポリテウマ、或いは、カトイキアとも呼ばれる政治的・宗教的自治組織を形成していたが、エクレシア(教会)は政治的自治組織としては認知されず、専ら宗教の領域における自発的結社の性格を持っていた。回心者たちは教会(ἐκκλησία)を形成したが(Iテサ1:1)、それは組織形態からすると自発的加入者によって結成される宗教結社の一つである¹⁹。但し、初期キリスト教共同体が、ヘレニズム世界の自発的結

¹⁸ Schürer, 3.148-149.

¹⁹ Ascough, 176-190; idem., "The Thessalonian Christian Community as a Professional Voluntary Association," *JBL* 119 (2000) 311-328; J.S. Kloppenborg, "Edwin Hatch, Churches and *Collegia*," in *Origins and Method: towards a New Understanding of Judaism and Christianity* (FS. J.H. Hurd; ed. B.H. McLean; JSNTSup86; Sheffield: JSOT, 1993) 212-238; B.H. McLean, "The Agrippinilla Inscription: Religious Associations and Early Church Formation," *ibid.*, 239-270を参照。これに対して、W.A. Meeks, *The First Urban Christians: The Social World of the Apostle Paul* (New Haven: Yale University Press, 1983) 74-84は、ヘレニズム世界の結社と教会とは用語上も組織形態上も異なることが多いので、パウロが設立した教会はヘレニズム世界の結社をモデルにはしておらず、むしろ家庭を準拠モデルとしているとしている。

社の呼称として一般的であった $\theta\acute{\iota}\alpha\sigma\omicron\varsigma$ (*IG* X/2 nos. 260, 309, 506) や $\kappa\omicron\iota\nu\acute{\omicron}\nu$ (*CIG* 1800; *PLond* 2139) を使用せず、民会の集会を表す $\acute{\epsilon}\kappa\kappa\lambda\eta\sigma\acute{\iota}\alpha$ を用いていた点は特殊であるが、これは $\beta\eta\rho$ を $\acute{\epsilon}\kappa\kappa\lambda\eta\sigma\acute{\iota}\alpha$ と訳した七十人訳の用語法を継承したと考えられる (申 18: 16; 31: 30; 詩 26 [25]: 11 LXX 他)²⁰。

エクレスシアはユダヤ教のシナゴグに対比さるべきであるが、後者が宗教的共同体を指すのみならず (*CIJ* 1.282, 301, 318, 319, 343, 368, 383, 390, 425, 433, 504, 508, 509, 510, 537, 548), 宗教活動が行われる建物を指すことがあるのに対して (ヨセフス『古代誌』 16.164; フィロン『フラックス』 45-48, 55; 『ガイウス』 132, 137, 156), 前者は新約時代には専ら宗教的共同体を指した。七十人訳において、シユナゴグ (出 12: 3, 6, 19; レビ 4: 13, 14, 15 他多数) とエクレスシア (申 4: 10; 18: 16; 代上 23: 1, 2; 13: 2, 4 他多数) は互換的に使用され、共に会衆または集会を意味しているが、新約聖書は両者を区別し、前者をユダヤ教のシナゴグの呼称とし (マタ 4: 23; 6: 2, 5; 13: 34; 23: 6, 34; ヨハ 6: 59; 18: 20; 使 6: 9; 9: 2; 13: 5, 14; 黙 2: 9; 3: 9 他), 後者をキリスト教会の呼称として用いている (マタ 16: 18; 18: 17; I コリ 1: 2; II コリ 1: 1; ガラ 1: 2)。これは、初期キリスト教による用語の差異化の試みである。

キリスト教に入信した者たちは、信仰故に周辺世界から孤立し、攻撃を受けたので (マコ 8: 34-38 並行; ヨハ 16: 18-25; フィリ 1: 29; I テサ 1: 6; 2: 14 他), 教会は代替家族として機能し、神の家族の構成員として互いに兄弟姉妹と呼び合うこととなった (マタ 18: 15; マコ 3: 31-35 並行; I コリ 1: 10; 2: 1; 3: 1; ガラ 1: 11; 3: 15; 6: 1; フィリ 1: 12; I テサ 2: 1, 17; 4: 1; ヤコ 1: 2; 2: 6 他多数)。教会員同士は、互いに仕え合い (ヨハ 13: 14), 兄弟愛を持って接することが求められた (ヨハ 13: 34; I ヨハ 1: 10; 3: 11-18; I テサ 4: 9)。

先に述べたように、ディアスポラのユダヤ人たちは、ユダヤ人として帰属意識と一体感を持ち、エルサレムを母なる聖なる都として尊重し、エルサレムの神殿に毎年神殿税を集めて送り、エルサレムの神殿で行われる祭りに巡礼として参加した (ヨセフス『古代誌』 17.26)。初期のキリスト教徒たちも、広大な地中海世界に散在して生活していても、同一の主を信じる者としての一体感を持っていた。特に、後 70 年以前は、エルサレムの原始教会が最初の教会として本山的地位を持っており、アンティオキアの教会において異邦人信徒に割礼を施し、律法を守らせるべきかどうかに関して論争が起こった時には、使者を

²⁰ Meeks, 79-80 を参照。これに対して Kloppenborg, 231; Ascough, 71-78 は、 $\acute{\epsilon}\kappa\kappa\lambda\eta\sigma\acute{\iota}\alpha$ がヘレニズム世界で自発的結社の集会の呼称としてされていた例を指摘する。

エルサレムの教会へ送って意見を聞いたので、この問題を巡って所謂使徒会議が開かれた（ガラ 2：7-9；使 2：13-42；3：1-26）。使徒会議の結果は書簡によって異邦人教会に伝えられ（使 15：22-35）、キリスト教世界として教理上、信仰生活上の一体性を保つ努力がなされた。

パウロは、復活のキリストとの出会いによって使徒職を与えられ（I コリ 9：1；15：8；ガラ 1：15-16）、人によって選任されたのではないことを強調する一方で（ガラ 1：1）、折に触れてエルサレムの使徒たちを訪れている（ガラ 1：18-20；使 11：30；15：1-21；21：17-26）。特に、使徒会議の際に合意された「貧しい者たちを覚える」（ガラ 2：10）という約束を重要視して、ディアスポラの宣教地である、マケドニアやアカイアの教会において熱心に献金活動を行い（II コリント 8：1-24；9：1-15）、集めた献金を届けるためにエルサレムへ上京することになったのも（ロマ 15：25-28）、エルサレムのユダヤ人教会とディアスポラの地の異邦人中心の教会との間に存在した一体性の具体的表現であった。

他方、ディアスポラの様々な都市に散在する教会相互の連帯性も存在し、パウロはコリントの教会に滞在しながら、まだ訪れたことのない首都ローマの教会に対して長大な書簡を書き送って、自らの福音理解を展開し、将来に計画するイスパニア伝道の拠点としての協力を依頼している（特に、ロマ 1：1-17；15：22-29 を参照）。

文化的適応と唯一神論

ヘレニズム時代以降、地中海世界に住むディアスポラのユダヤ人は言語の面では、周辺世界に同化し共通語であったギリシア語を母語として生活していたことが当時の文献資料や碑文資料やパピルス資料によって知られる²¹。ディアスポラのユダヤ人の大多数は既にヘブライ語が読めなくなっていたので、前 2-4 世紀にアレクサンドリアで旧約聖書のギリシア語訳である七十人訳聖書が書かれた（アリテアス 301-321；ヨセフス『古代誌』12.11-118；フィロン『モーセの生涯』2.25-42）。彼らはギリシア語で思考し、ギリシア語の聖書を読み、ギリシア語で礼拝を守っていたのである²²。しかし、彼らは天地の創造主なる唯一の神以外の神の存在を認めず、他の神々を人間が作った偶像とした（知 13：1-15：19）。ギリシア・ローマ世界の多神教的な宗教文化において、唯一神教の立場に立つ

²¹ Tcherikover, 347.

²² T. Rajak, "Judaism and Hellenism Revisited," in idem., *The Jewish Dialogue and Rome : Studies in Culture and Social Interaction* (以下, *Dialogue* と略記) (Leiden : Brill, 2001) 4.

ユダヤ教は極めて異なるサブカルチャーを形成した。他の神々の存在を認めず、ギリシア・ローマの神々を拝むことを偶像礼拝として拒否することは、周辺世界からは、共同体の守護神を認めず、祝祭に参加しない非社会的行為としては非難された（ヨセフス『古代誌』3.179；19.290；『アピオン』2.79, 89, 96, 148, 258；タキトゥス『歴史』5.5.1）。多神教的なギリシア・ローマ世界の文化的風土の中で、ユダヤ人は極めて異質な民族集団として、社会の多数から敵意を持って見られることが多かった（III マカ 3：3-7）²³。

ディアスポラのユダヤ人の中には、異邦人社会の中に深く関与し、異邦人世界の出世の階梯を上る過程でユダヤ教を棄てる例も散見される²⁴。しかし、こうしたケースは例外的であり、大多数のユダヤ人たちは、ヘレニズム文化を取捨選択して受容し、ユダヤ教の宗教と慣習を維持していた²⁵。アリストテアスの手紙の著者や、哲学者のフィロンや、歴史家のヨセフスは、ギリシア・ローマ世界の教養を積み、ギリシア・ローマ世界の哲学や倫理思想の概念を駆使してユダヤ教の思想を再解釈し、ユダヤ教が信頼に足るものであることを示そうとしたのであるが、多神教的な宗教文化は唯一神論の立場から拒否した（アリストテアス 139；シビュラ 3：11-16；ヨセフとアセナテ 11：7-10；12：51；ヨセフス『古代誌』4.201；5.112；8.335；18.257-259；『アピオン』1.224-225；2.66, 85-86；フィロン『十戒総論』64；『十戒各論』2.164-165；『モーセの生涯』2.193-195；『ガイウス』115；『世界の創造について』170-172 他）²⁶。

初期キリスト教徒は、ディアスポラのユダヤ人たちと同様に、ギリシア・ローマ世界の共通語であったギリシア語を使用していた。彼らが礼拝において使用する言語は基本的にギリシア語であり、読む聖書はヘブライ語本文ではなく、七十人訳であった。初期キリスト教は言語面では、ディアスポラのユダヤ人が形成した聖書的ギリシア語を継承し、適宜改変を加えながら用いていた。周辺世界の共通語であるギリシア語を用いていたことは、異邦人世界への宣教に有力な武器を与え、異邦人宣教は大きく進展し、パウロの時代に既に数の上では、異邦人信徒の方が多数を占めるに至った（ロマ 11：11-36 を参照）。

異邦人信徒はキリスト教に回心することを通して、先祖伝来の神々を拝む道を捨てて、天地の創造者なる唯一の神を信じる道に入った（I テサ 1：9-10；ガラ 4：8-9）。周辺世界の多神教的文化世界において、複数の神々が並立し、一つの神を拝むことは他の神々を

²³ T. Rajak, "A Roman Charter for Jews?," in *Dialogue*, 330；E.M. Smallwood, *The Jews under Roman Rule from Pompey to Diocletian* (2nd ed.；Leiden：Brill, 1981) 123-124.

²⁴ Tcherikover, 353；van Unnik, 66.

²⁵ Schürer, 3.139-141；Tcherikover, 354-357；van Unnik, 53-56.

²⁶ Barclay, 138-180；430-434.

排除することにはならない。それに対して、唯一神教の立場に立つユダヤ教徒やキリスト教徒は、偶像礼拝を避けなければならないので他の神々を拜むことをしない。パウロは知恵の書の作者と同様に（知 13：1-15：19）、ギリシア・ローマ世界の倫理的混乱の原因を天地の創り主を信じず、偶像礼拝に耽ることに見て、厳しく批判している（ロマ 1：18-32）。パウロはコリントの開拓伝道において、回心者たちに、神は唯一であり、主イエスは唯一であると強調した（I コリ 8：6）。回心者たちがパウロの教えに従うことは、社会生活の上では町や同業組合の守護神を拜まず、共同体の祝祭に参加しないことを意味した。そのような生き方は周辺社会からは閉鎖的な反社会的態度と見られ、民族同胞から反発や迫害を覚悟しなければならなくなった（フィリ 1：28-30；I テサ 1：6；2：14）。ディアスポラのユダヤ人が律法に従って、先祖伝来の宗教的習慣を守ることは歴代皇帝によって承認されていたので、ギリシア系市民から共同体が攻撃された時に皇帝に対して保護を求めたのに対して（ヨセフス『古代誌』16.160-166；フィロン『ガイウス』155-158）、キリスト教にはそのような特権は与えられておらず、周辺世界からハラスメントや迫害を受けてもローマ帝国に保護を求めることは期待出来なかった。初期のキリスト教に入信することは、周辺世界が「迷信」（タキトス『年代記』「ネロ」15 卷 44 節；スエトニウス『ローマ皇帝伝』「ネロ」16 節）として排斥する宗教に、法的保護を持たずに無防備で加入する道を選択することを意味した。

宗教的アイデンティティの指標

父祖たちの律法に従って生活することが、ディアスポラのユダヤ人たちに、民族的・宗教的アイデンティティを与えており（ヨセフス『古代誌』11.339；12.271；『アピオン』1.212）律法の遵守の課題は、社会生活の中では、割礼を受けることと、食物規定を守ることと、安息日を守ることに集中的に現れた²⁷。父祖達から伝えられた律法に基づくユダヤ人の生活習慣は周辺の諸民族と極めて異なる独特のものであることが注目されるようになる²⁸。ユダヤ教徒にとって *Ἰουδαϊσμός* 「ユダヤ教」とは、単なる宗教的世界観の体系ではなく、常に具体的な生き方の形で表現される実践的教えであった。また、「ユダヤ風の生活をす

²⁷ M. Simon, "Das Problem der jüdischen Identität in der Literatur des jüdischen Hellenismus," *Kairos* 30 (1988/89) 41-52；E.P. Sanders, *Judaism: Practice & Belief 63 BCE-66 CE* (London: SCM; Philadelphia: Trinity, 1992) 17-22；L.H. Feldman, *Jew & Gentile in the Ancient World* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1993) 153-170；Barclay, 428-442；J. Leonhardt-Balzer, "Jewish Worship and Universal Identity in Philo of Alexandria," *Jewish Identity in the Greco-Roman World* (ed. J. Frey et al.; Leiden: Brill, 2007) 40-41.

²⁸ Barclay, 399-444.

ること」こそが、ヘレニズム世界に対してイスラエルの信仰を定義し、ユダヤ人たちに宗教的・民族的アイデンティティを与えるものであった²⁹。「ユダヤ風の生活をする」こととは、天地の創造者なる唯一の神以外の神を拝まないことであり、父祖たちの律法に従って生活することであった（ヨセフス『古代誌』11.339；12.271；『アピオン』1.212）³⁰。律法の遵守は、割礼を受けることと、食物規定を守ることと、安息日を守ることに集中的に現れた³¹。

安息日を守る習慣のない異邦人世界の中で、ディアスポラのユダヤ人達が安息日を遵守することは、自らを天地の創造主を信じるユダヤ人・ユダヤ教徒であることを外形的行動によって示すことであった（Iマカ 2：29-41；IIマカ 15：1-5；ヨセフス『古代誌』12.274；14.226, 264；16.167-168；『戦記』1.146；2.147；『アピオン』1.209；フィロン『律法各論』2.260；『アブラハムの移住』89-93；『モーセの生涯』2.213；『フラックス』11, 96）³²。また、ユダヤ人が捕囚の地にあつて生まれて八日目の男子に、アブラハムに神が与えた契約のしるしとして割礼に割礼を施すことは（創 17：11, 13；ベン・シラ 44：20）、ユダヤ人に民族的・宗教的アイデンティティを与えた（エステル 8：17；Iマカ 1：60-61；IVマカ 4：25；ヨセフス『古代誌』1.192；13.257-258, 318-319；『アピオン』1.171；フィロン『アブラハムの移住』89-93；『律法各論』1.1-11）。ヘレニズム期以降、ユダヤ人が地中海世界に広く移住するようになると、ユダヤ人の割礼の習慣は、ギリシア・ローマ世界の人々からは奇異な目で見られた（ヨセフス『アピオン』1.171；2.137；タキトゥス『歴史』5.5.2；ユベナリス『風刺詩』14, 96-104；ストラボン『地誌』16.2.37；スエトニウス『ローマ皇帝伝』「ドミティアヌス」12.2）。

ユダヤ人が旧約聖書の食物規定を守って「清い」とされる食物（レビ 11：1-46；申 14：3-21）のうち、肉に血を含まないように特別な仕方で屠殺されたもの（レビ 17：10-14；申 12：16, 23-24）だけを食ふこと、特に、豚肉を決して食ふべないことは周辺世界に良く知られ、ギリシア・ローマの著述家たちも否定的ニュアンスを込めて言及している

²⁹ L.I. Levine, 12-40.

³⁰ Tcherikover, 305-306.

³¹ M. Simon, "Das Problem der jüdischen Identität in der Literatur des jüdischen Hellenismus," *Kairos* 30 (1988/89) 41-52；E.P. Sanders, *Judaism: Practice & Belief 63 BCE-66 CE* (London: SCM；Philadelphia: Trinity, 1992) 17-22；L.H. Feldman, *Jew & Gentile in the Ancient World* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1993) 153-170；Barclay, 428-442；J. Leonhardt-Balzer, "Jewish Worship and Universal Identity in Philo of Alexandria," *Jewish Identity in the Greco-Roman World* (ed. J. Frey et al.；Leiden: Brill, 2007) 40-41.

³² G. Dellling, *Die Bewältigung der Diasporasituation durch das hellenistische Judentum* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987) 24-27.

(キケロ『フラックス弁論』28, 67; タキトゥス『歴史』5.5.2; ストラボン『地誌』16.760-761)³³。

他方、ユリウス・カエサルはユダヤ人達に好意的な政策を採り、彼らに安息日や割礼や食物規定等の宗教的慣習を守ることを許容し、収入の一部を神殿税としてエルサレムに送ることも承認した(ヨセフス『古代誌』14.213-216)³⁴。帝政の創始者アウグストゥスはカエサルの政策を継承して、帝国内のユダヤ人達が父祖伝来のユダヤ教の習慣を实践することと神殿税をエルサレムへ送ることを認め、以後のユダヤ人政策の範を示した(ヨセフス『古代誌』16.160-166; フィロン『ガイウス』155-158)³⁵。

初期キリスト教について言えば、異邦人の回心者に律法の遵守を要求するユダヤ人信徒たちに対して(ガラ2: 4-6; さらに、使15: 1, 5を参照)、律法からの自由をキリスト教の本質として主張したパウロの福音理解によって(ロマ3: 21-28; ガラ2: 4-5; 2: 16-21; 5: 1-6)、割礼や、食物規定や、安息日は、キリスト教徒にとってアイデンティティを与える指標としての意味を持たなくなり、アディアフォラの事柄となった(ロマ14: 1-12を参照)。ディアスポラのユダヤ人たちからみれば、パウロは律法を破り、ユダヤ人の宗教的・民族的アイデンティティを捨てることを勧める危険な背教者ということになり、反発と攻撃の対象となった(使13: 44-52; 14: 1-7; 17: 1-9; 18: 5-17; 21: 27-36; 21: 37-23: 35; ロマ15: 31; IIコリ11: 24; Iテサ2: 14-15)。

キリスト教徒である指標は律法を遵守することや割礼を受けることではなく、洗礼を受けることである(使2: 37-42; ロマ6: 3-4)。初期の教会にとり洗礼は、復活の主から委託された務めであり(マタ28: 16-10)、民族的帰属の相違や、社会的身分の差や、性別を超えたキリストに属する者としての一体性を与えるものであった(Iコリ12: 12-13; ガラ3: 26-29)。キリスト教に回心することは、多神教的な異教世界とも、ユダヤ教世界とも異なる、独自のアイデンティティを与えた。他方、最後の晩餐の記念(マタ26: 26-30; マコ14: 22-26; ルカ22: 15-20; Iコリ11: 23-25)、或いは、復活のキリストとの食事の記念(ルカ24: 30, 40-41; ヨハ21: 12-13)として、初期のキリスト教会は夕方に

³³ M. Stern, *Greek and Latin Authors on Jews and Judaism* (3 vols; Jerusalem: The Israel Academy of Sciences and Humanities, 1974-1984) 1.170, 181, 294-311, 549-550; 2.17-93, 110, 128-131; M. Whittaker, *Jews & Christians: Graeco-Roman Views* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984) 63-85を参照。

³⁴ H.J. Leon, *The Jews of Ancient Rome* (Updated edition; Peabody, MA: Hendrickson, 1995) 5-10.

³⁵ Schürer, 3.117-118. これに対して、T. Rajak, "A Roman Charter for the Jew?," in idem., *The Jewish Dialogue with Greece and Rome* (Leiden: Brill, 2001) 313は、この勅令が妥当する範囲が小アジアの都市に限られるとしている。

集まり、共同の食事をした後に聖餐を行っていた（Iコリ 11：17-22を参照）。2世紀初頭のシリアの教会では、聖餐に与る者を洗礼を受けた者に限定するようになった（ディダケー 9：1-5）。

初期のユダヤ人キリスト者は、依然として安息日を守っていたようであるが（マタ 24：20；ロマ 14：6；ガラ 4：10；コロ 2：16），2世紀になると、安息日の遵守と主の日の遵守とは相容れないものとされ（イグ・マグ 9：1；バルナバ 15：9），ユダヤ教とキリスト教の分離が完成した。こうして、主の日に教会に集まって礼拝をすることも、ユダヤ教とは異なるキリスト教徒の指標となった。

3. 結論と展望

(1) 地中海世界に生きる初期のキリスト教徒の大多数は異教徒の間に離散して暮らししており、ディアスポラ状況の中に置かれていたので（ヤコ 1：1；Iペト 1：1），ディアスポラ概念を拡張して、離散のユダヤ人だけではなく、異教徒の間に離散して暮らす初期のキリスト教徒の形容として用いることが出来る。

キリスト教徒のディアスポラ状況の考察のためには、ディアスポラのユダヤ人が直面した状況と対比することは有効な分析手段である。特に、両者にとって、周辺世界との文化的同化と宗教的アイデンティティの維持の問題は緊張を孕んだ重要な問題であった。

(2) ディアスポラの地にあつて宗教的・民族的アイデンティティを維持するために、ユダヤ人達はそれぞれの地でポリテウマやカトイキアと呼ばれる共同体を形成し、指導者たちによって構成されるゲルーシアを中心として指導されて自治を営んでいた。ユダヤ人たちの居留区にはシナゴークが建てられ、安息日毎の礼拝と律法の教育がなされていた。それに対して、キリスト教徒はエクレスシア（教会）を形成して、信仰を維持し、宣教を営んだ。キリスト教は早い時期に民族の枠を超えて発展したので、教会は民族的共同体ではなく、純粋な宗教的共同体として形成された。教会はギリシア・ローマ世界全体に散在して存在していたが、唯一の主キリストの教会と一体性を持ち、キリスト教徒としての連帯性を持っていた。例えば、使徒会議の結果を伝える書簡が書かれ、使者を通して異邦人教会に届けられたのも（使 15：22-35），教会としての教理上、信仰生活上の一体性を保つためであった。他方、パウロが異邦人教会で集めた献金をエルサレムの教会に届けたのもその表れである。

(3) ディアスポラ状況の中で、敬虔なユダヤ人達のグループは、言語面では周辺社会の共通語であるギリシア語を取り入れながらも、ユダヤ人としての宗教的・民族的アイデ

ンティティを保ち、他の神々を拝むことをせず、父祖達の伝えた律法の戒めに従った生活を貫いた。ディアスポラのキリスト教会もギリシア語を用いており、言語面では周辺世界に同化していたが、宗教面では多神教的世界に対して一線を画していた。初期のキリスト教徒の多くは、キリスト教に入信することによって、ギリシア・ローマ世界の神々を捨てて、唯一の神を信じ、仕える生活に入った（Iテサ 1：9-10；ガラ 4：8-9）。このことによって彼らは異邦人世界の中では特殊な存在となり、孤立と軋轢を余儀なくされたが、ユダヤ人と異なり、自分たちの宗教的権利の保護をローマ帝国に求めることは出来なかった。このような中で、教会は代替家族として機能し、会員たちは互いを主にある兄弟姉妹とみなし、相互に助け合った。

（4）ディアスポラの状況下で、ユダヤ人（ユダヤ教徒）であることに指標は、割礼と安息日と食物規定であったが、初期のキリスト教はこれらをアディアフォラの事柄としたため、信徒であることの目に見える指標ではなくなった。これらに代えて形成されたキリスト教徒であることの目に見える指標は、洗礼を受けることと、聖餐に与ること、週の初めの日に行われる主日の礼拝を守ることであった。